Shu Ogawara

ミュージアム通信

小川原脩記念美術館　倶知安風土館
☎ 21-4141　☎ 22-6631

開館時間は 9 時～ 17 時
（入館は 16 時 30 分）

4 月の休館日
5 日、12 日、18 ～ 22 日、26 日

展覧会のお知らせ

■常設展示

「小川原脩 自伝風な展覧会　アジアの大地」
会期：開催中～ 4 月 17 日（日）まで

「小川原脩展　土着と風土」
1972 年、「『描写』あるいは『土着』をめぐって」という往復書簡が美術雑誌に掲載されました。文学者の牧野氏からの問いに、小川原脩が応じたものです。「土着」を意識して創作すべき、土地っ子の芸術を…小川原脩が抱いた「土着と風土」への想いを軸に画業を辿ります。
会期：4 月 23 日（土）～ 7 月 10 日（日）

■企画展示

「くっちゃんＡＲＴ 2016」
会期：開催中～ 4 月 17 日（日）まで
＜関連イベント＞
アーティスト・トーク「くっちゃんあ～とＮＯＷ！」最終回
日時：4 月 9 日（土）14 時～ 15 時 30 分
出品作家が自身の作品についてお話しします。
観覧料がかかります。申込み不要、直接美術館へお越しください。
※詳しくはホームページをご覧ください。

「嶋貫由紀子展　Flower kings」
会期：4 月 23 日（土）～ 7 月 10 日（日）
倶知安でも創作活動をしていたオーストリア在住の美術家・嶋貫由紀子さんの個展。ファンタジックな作品の数々をお楽しみください。
＜関連イベント＞
1）アーティスト・トーク
日時：4 月 23 日（土）11 時～ 11 時 30 分
本展作家の嶋貫さんに、自身の作品について伺います。
観覧料がかかります。申込み不要、直接美術館へお越しください。
2）技法体験ワークショップ「クレイ・ペインティングに挑戦」
日時：4 月 30 日（土）
本展作家の嶋貫さんが講師となって、土を使って絵の具を作ります。
※参加費、申込み方法などは、別途ご案内チラシ、またはホームページをご覧ください

アート・イベントのお知らせ

■土曜サロン

「小川原脩とシュルレアリスム①」
日時：4 月 16 日（土）14 時～ 15 時
講師：柴　勤（当館館長）　会場：当館映像ルーム　聴講無料

■地域文化講座

日時：5 月 18 日（水）18 時 30 分～　講師：伏木田光夫　氏（画家）
会場：当館ロビー　聴講無料

「ふるさと探訪」参加者募集

今年も春から秋にかけて 3 ～ 4 回、自然観察と軽登山を兼ねた活動を行います。今年はニセコ・羊蹄の外にも出かける予定です。詳細は風土館にお問い合わせください。参加ご希望の方は、4 月 16 日（土）までに風土館に申し込んでください。
■費用／無料
■定員／ 10 名
■お問い合わせ／倶知安風土館　☎ 22-6631

美術館長から

「くっちゃん ART 2016」はまだまだ開催していますが、今回は初めて「アーティスト・トーク」なるものを試みています。つまり、作家ご自身による作品のお話し。作家の人数が多いのでリレー形式とし、何日間かに分けました。これが何と大盛況。初回はオーストラリアの作家二人を含めて 6 人のトークでしたが、参加者は 40 人ほど。和やかな雰囲気の中、展覧会場は熱気が充満。2 回目はわざわざ韓国から駆け付けてくれた作家、ルーマニアからメッセージを寄せてくれた作家を含め計 4 人に対し、参加者はおよそ 50 人。皆さん、やはり作家自身の生の声を聴きたいのでしょうね。最終回は 4 月 9 日です。お楽しみに。

館　長　柴（しば）　勤（つとむ）

海と山と田園と－ミュージアムロード情報－

【クローズアップ】有島記念館
「石垣　渉　水彩画の世界―身近にある景色―」平成の「生まれ出づる悩み」コンテスト入選者による若手作家展。
会期：開催中～ 6 月 12 日（日）
■有島記念館　☎ 0136-44-3245
■木田金次郎美術館　☎ 0135-63-2221
■西村計雄記念美術館　☎ 0135-71-2525
■荒井記念美術館　☎ 0135-63-1111
4 月 23 日（土）オープン

感動の場 一点

『無題』

1971 年　小川原　脩　画

春の訪れとともに、倶知安にも白鳥が飛来する。

小川原脩は、あらゆる年代において馬・犬・大白鳥といった動物を描いており、大白鳥は実に多様なポーズを写しとっている。それぞれが自由に振る舞う白鳥たちが画面いっぱいに群れをなすものあれば、一羽だけの白鳥を描いたものもある。一羽であれば、長い首をくるりと曲げているもの、片足で静かに佇むもの、大きな翼を広げたもの、この作品のように羽毛に顔をうずめているもの、さまざまである。

白い羽毛は鮮やかな色が散りばめられ、結晶やきらめく雪原を思わせる。雪そのものは無色透明だが、降り積もり、たくさんの色の光線を反射して我々の目に入り白という色に見える。その色彩の根本を捉えたかのようだ。長い首を後ろに向け背に載せてうずくまり、折りたたまれた翼、足までも器用に折りたたんで隠している。白いかたまりとなった体から飛び出した羽の先端は繊細で、こちらは柔らかな触り心地さえ感じさせる。画面の下地には明るい黄緑色が塗り込まれ、塗り残された部分が大白鳥の輪郭として見えている。背景はパステルカラーのピンクとブルー。小川原流の色あそびと言っても良いだろう。

文：沼田　絵美（小川原脩記念美術館　学芸員）

ふるさと探訪

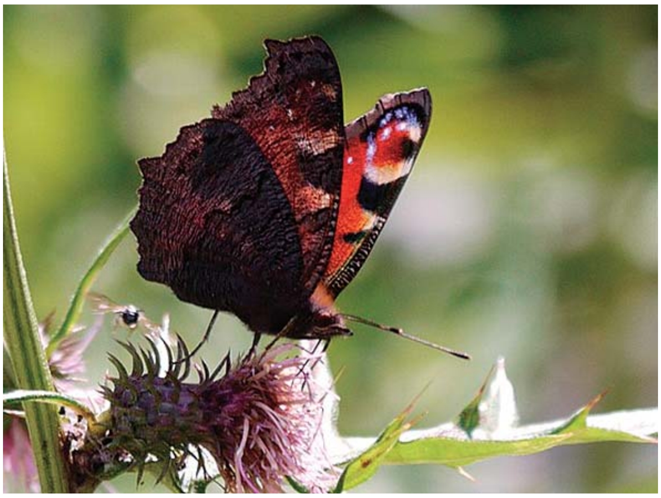
397 回

―目を覚ましたチョウ―

日差しが強くなり、雪面をわたる風に春を感じるようになった。ぼんやりと霞んだ羊蹄山の姿にも心が浮き立つ。

最近、チョウの姿をしばしば目にする。花を訪れる白いチョウではなく、黒っぽくて風に舞う落ち葉のように見える。家の軒先にまつわりつくように飛んでいたり、日当たりの良い壁面に静止して日向ぼっこをしていたりする。成虫で冬を越したチョウが目を覚ましたのだ。

雪国で、成虫で冬を越すチョウはほんの数種に限られる。この地域で最も身近に見られるのはクジャクチョウだ。成虫は、ハネの裏側が落葉のようにしか見えない色合いをしているのに対し、表側は鮮やかな赤褐色の真ん中に大きな蛇の目の文様でとても美しい。そのため、ゲイシャという種名がついている。



さて、長い冬越しから目を覚ましはしたのだが、その成否はむしろこれからにかかっている。と言うのは、飲まず食わずで冬を越してきたので体力はすでに限界に近いのだが、エサとなる花が咲き始めるのはまだしばらく先のことだからだ。目覚めてしまうと、どうしても体力の消耗は早く進む。だから早く目覚めることは餓死の危険を高め、結局のところ冬越しの失敗を招くことになる。チョウにとって冬越しに適した場所は、暖かいところよりもむしろ寒い場所の方なのだ。目覚めが遅い方が目覚めた後の体力の損失が少なく、結果として冬越しに成功しやすいのである。チョウの冬越しに、暖かさはむしろ禁物なのだ。

文：岡崎　毅（倶知安風土館館長）